

# 札幌市におけるエネルギー貧困の「生きられた経験」の分析

## 環境経済・政策学会大学院生研究助成報告

An analysis of the lived experience of energy poverty households in Sapporo

○古賀 勇人\*

Hayato Koga

本発表は、環境経済・政策学会大学院生研究助成報告である。本助成の研究成果は一部既に公刊済みであり（古賀，2024）、助成報告という性質上、一部内容的な重複がある。

### 1. はじめに

エネルギー貧困とは、「社会的、物質的に必要な程度の家庭内エネルギーサービスを得ることができない状態」（Bouzarovski and Petrova, 2015, p. 31）と定義される。これまで、日本におけるエネルギー利用における困窮状態は、社会保障システムによってカバーされてきた。具体的には、冬季加算を含む生活保護の生活扶助と、地方自治体レベルでの福祉灯油等である。これらの制度は、寒冷地の生活困窮者における冬季のエネルギー問題を一定程度緩和する役割を果たしてきた可能性がある一方で、その有効性と限界は十分に検証されていない。本研究では、エネルギー貧困概念を用いながら、エネルギー貧困世帯の「生きられた経験」を分析することで、この現状を問題化する。

### 2. 分析方法

本研究では、解釈学的現象学分析を用いてエネルギー貧困世帯（表）の「生きられた経験」を分析する。これは、経験している人の視点から記述された経験であり、「何かを明確に、知的に理解している経験ではなく、むしろそれに先立つ経験」[中澤，2020，p. 8]である。

表 インタビュー参加者の基本情報

| 名前 | 世帯構成       | 性別       | 年齢             | 生活保護の有無 | 住居          | 暖房           |
|----|------------|----------|----------------|---------|-------------|--------------|
| A氏 | 2人<br>(夫婦) | 男性<br>女性 | 80-85<br>80-85 | 有       | 市営住宅        | 集中暖房         |
| B氏 | 1人         | 女性       | 75-79          | 無       | 市営住宅        | 集中暖房         |
| C氏 | 1人         | 女性       | 70-74          | 有       | アパート        | ストーブ<br>(灯油) |
| D氏 | 1人         | 女性       | 70-74          | 有       | アパート        | ストーブ<br>(灯油) |
| E氏 | 1人         | 女性       | 80-85          | 有       | 戸建て<br>(賃貸) | ストーブ<br>(灯油) |

出所：筆者作成

\* マンチェスター大学地理学部 Department of Geography, The University of Manchester M139PL, Uni of Manchester, Oxford Rd, Manchester E-mail: hayato.koga@manchester.ac.uk

「生きられた経験」の分析に際して、本研究は、北海道札幌市の高齢者世帯を対象にした。手法は半構造化インタビューであり、参加者が「生きられた経験」を叙述できるよう、探索的で会話的なインタビューを実施した。インタビューはそれぞれ2～3時間程度であり、その際、補償的な謝礼を渡している。以上に加えて、「生きられた経験」と制度との関係性をより明確に把握するため、北海道内における自治体関係者や実務家等計14名への聞き取りを実施した。

### 3. 分析結果

エネルギー貧困の経験として、という3つの集団的経験テーマが特定された。①エネルギー利用とその苦境のあり方に多様性があることが確認された。エネルギー利用とその苦境のあり方は多様であり、以下の3つの形態が確認された。すなわち、「食の削減」、「エネルギー利用の削減」、「エネルギー利用のコントロールができない」である。②エネルギー利用とそれ以外との双方向的な関係性が確認された。エネルギー利用のあり方によって食や社会関係の削減といった行動が起こる一方で、賃貸借関係やインフラ、社会関係のあり方もエネルギー利用のあり方を規定するという関係性が確認された。③対処行動として重ね着のみならず、暖房施設のある公共施設への移動といった行動も確認された。

この知見を日本の社会保障制度と照らし合わせると、エネルギー利用の困窮状態が日本において矮小化される様相は、以下の3要素の相互作用として説明できる。すなわち、①制度的認識の限定性、②（制度及び当事者における）エネルギー利用に関するニーズの不明確さ、③当事者の認識における矮小化、である。

### 4. 結論

エネルギー貧困への脆弱性という枠組みによる問題の措定は、矮小化されているエネルギー利用における困窮状態を問題化できる。同時に、エネルギー利用における困窮の要因を、所得に一元化された基準を超えて把握することができるため、多面的な政策論の方向性を考慮することができる。

### 参考文献

Bouzarovski, Stefan, and Saska Petrova, 2015, "A Global Perspective on Domestic Energy Deprivation: Overcoming the Energy Poverty-Fuel Poverty Binary," *Energy Research and Social Science* 10:31-40.

古賀勇人（2024）「日本の社会保障システムにおけるエネルギー貧困への脆弱性：札幌市における「生きられた経験」の分析から」『社会政策』16（1），314-325.

中澤瞳（2020）「フェミニスト現象学とは何か？」稲原美苗・川崎唯史・中澤瞳・宮原優編『フェミニスト現象学入門——経験から「普通」を問い直す』ナカニシヤ出版，2-12